

氏 名	豊 田 周 子
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 5117 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学 位 論 文 名	日本統治期台湾新文学にみる台湾知識人の精神史
論文審査委員	主 査 教 授 松 浦 恆 雄 副 査 教 授 齋 藤 茂 副 査 教 授 井 上 徹

論 文 内 容 の 要 旨

日本統治下の台湾において、社会運動の一環として始まった台湾新文学運動は、これまで歴史学や文学史的立場から研究が進められてきた。本論は、文学作品の分析を通して、日本統治期台湾新知識人（以下、新知識人）の多様な精神性の一端に接近を試みたものである。

第一章では、1920年代から30年代にかけて、新知識人に盛んに議論された「恋愛」と「結婚」の問題を論じた。中国五四新文化運動の影響を受け、台湾で中国語白話文の使用を提唱した張我軍（1902－55）の作品は、植民地台湾の描写が希薄だと評されてきた。しかし、彼の20、30年代の中国語作品を検討した結果、知識人の関心事であった「恋愛」や「結婚」に対する問題意識が認められ、漢民族だけでなく世界的問題でもあった女性の人権がテーマとなっていることが明らかになった。

第二章では、20年代後半から30年代中期にかけて、新知識人が重視した民衆と文学の効能の関係を考察した。抗日闘争組織・台湾文化協会に属した新知識人は、民衆の啓蒙に力を注ぐ一方で、民衆と不可分な在来習俗を「迷信」と看做す傾向があった。ところが、この協会の理事をつとめた頼和（1884－1943）は、一連の中国語小説において「在来習俗」を必ずしも否定していない。彼は科学的根拠がなく民衆の生活に害を及ぼす「迷信」には反対だったが、抑圧された民衆の精神的な支えとして在来習俗が機能していることも熟知していた。こうした点に他の新知識人との民衆に対する認識の差が認められることを論じた。

第三章では、30年代後期に台湾島内と日本「内地」の言論統制の差を利用して、台湾文学の発展に尽力した日本語作家の出版戦略を考察した。「内地」の文壇と関わりのあった楊達（1905－85）の小説には数種類の版本が存在するが、その中で「内地」刊行をめざした版本には、植民地の実情を訴える表現が多く書き込まれていることが分かる。さらにその内容には「内地」の文壇を席捲したプロレタリア文学の影響、社会主義リアリズムの観点に基づく描写が確認され、同時代の台湾中国語作家の表現とは一線を画していることを指摘した。

第四章では、40年代における台湾人のアイデンティティ問題を検討した。王昶雄（1915－2000）の日本語小説の主人公について人物形象を分析した結果、皇民化政策時期から決戦期にいたる台湾人のアイデンティティ問題は、〈皇民化/抵抗〉と割り切れるものではなく、極めて複雑な葛藤を伴うものであったことが明らかになった。また、民族に捉われないアイデンティティを模索するという、この作家に独特なテーマ探求の姿勢についても言及した。

最終章では、40年代末期に書かれた非公開作品の意義を論じた。戦前公表されなかった呉濁流（1900－76）の日本語小説を、創作当時の他の作家による公表作品と比較すると、言論統制の厳格な状況下にあっても新知識人の批判精神が存在していたことが確かめられる。また、この作品が公開作品の表現の深層を推察する参照枠となり得ることが理解できる。さらに、戦後の改訂本と比較した上で、改訂本が日本の読者向けに抵抗文学という性格を強め書き改められた可能性を指摘した。

論文審査の結果の要旨

本論は、日本統治期台湾の社会運動の一環として始まった台湾新文学運動において、中国語白話文・台湾語白話文・日本語を用いて書かれた作品に現れた台湾知識人の多様な心の動きに焦点をあて、その史的展開を論じたものである。

序章では、植民地統治下における言語問題やのちの章において取り上げられる諸問題が素描され、本論の議論の射程範囲と問題の所在が明示されている。

第一章では、張我軍の中国語白話詩集『乱都之恋』が台湾に遍在する「恋愛結婚問題」の重要性を訴えた時代の書であることを明らかにし、小説「白太太の哀史」の複雑な人物設定には民族問題に解消できない「女性問題」を前景化する役割のあることを指摘した点など、時代とともにある作品の価値を鋭く読み取っており高く評価することができる。

第二章では、頼和の台湾語語彙を含む中国語白話小説「鬥鬧熱」「蛇先生」の「迷信」問題を取り上げ、「迷信」を食い物にする行為への厳しい批判やそれに熱中する民衆の活力を生かそうとする視線など「迷信」に対する頼和の複雑な態度を明らかにしており、頼和の「迷信」・民衆理解の深さを再検討する重要な議論を提供するものとして評価できよう。

第三章では、日本語作家である楊逵が、台湾島内よりも言論統制が緩やかであった日本「内地」での公表を前提として書いた小説「模範村」を分析し、その生成過程を解明するとともに、その小説を当時の文脈に戻すことによって、三〇年代の台湾人日本語作家が持っていた文学活動とその表現の可能性を明らかにしており、その意義は大きい。

第四章では、王昶雄の日本語小説「奔流」「鏡」を分析して、「内地」留学により台湾と日本という二つの文化を体験した台湾人と台湾生まれの日本人のアイデンティティの揺らぎや、複数文化を統合する新たなアイデンティティの獲得を目指すに至る可能性などが明らかにされており、従来の王昶雄評価を更に豊かにした点が評価されよう。

第五章では、呉濁流の日本語長編小説「胡志明」を「潜在テキスト」という概念を用いて分析することにより、執筆当時にテキストを戻し、当時公開された作品との比較検討を加え、「胡志明」研究の新たな出発点を構築することに成功した。従来の研究の不備を補い、複数の新たな発明を含んだ論として評価に値するものと思われる。

終章では、本論を基礎として、より包括的な日本統治期台湾新文学にみる台湾知識人の精神史が構想されており、本論の方向性の妥当性を示すものとなっている。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。